

思ふに、後々までも城中の給仕人を掃除坊主と稱し、剃髮白衣にて、名も出家のやうにて勤めたり。是國初以來城中の掃除に坊主を出勤せしめたる遺稱なるべし。能登七尾長齡寺に傳來せる利家卿の印書に、伏見留主居坊主の事、貳人相詰させ、扶持方四人分申付候。惣持寺並に寶圓寺隱居の外は一ヶ寺も用捨有之間敷。と載せられ、又道場方よりも貳人相詰るやうにとの印書もあれば、是も諸宗の寺院より二人宛留主居番に出勤し、掃除などの事を勤めたりしと聞ゆ。七尾長福寺に傳來せる、大納言利家卿と能登侍從利政君連署したる慶長二年七月十二日の判印書に、府中藏之留守居に置坊主門徒之事云々。と載せられたり。平次思ふに、いにしへ戰國の頃は、僧侶といへども城中などの留守居を勤め、或は城中の掃除番として諸宗寺院より伴僧を出勤せしめ、國事に勉勵せし事知られけり。混見摘寫に云ふ。今の世に茶堂坊主・掃除坊主などいふものゝある事は、戰國の頃軍兵共寺領を沒收し、或は僧徒をかすめ取りて、己が遣ひ者としたるなるべし。國初の頃までも僧の寺などを失ひたる者は、大名の家の掃除坊主に出でたり。されば女犯

肉食をせず、己が部屋には本尊佛を居る置きて、潜に朝夕の勤行をもしたりと、外祖母の語りしと也。と載せたり。此の傳説などにも、掃除坊主は戰國の頃よりの遺稱にて、そのかみ其の國の領主へ、館の掃除方に仕はれし僧侶の名残にて、治世後は掃除方等に從事する給仕人を扶持しけるに、國初前よりのならはしに任せ、掃除坊主と稱し、剃髮白衣にて名も僧侶とひとしく名乗らせ、召仕ひしもの也。是を足利將軍の頃なる同朋の如くいひなせるは非なるべし。同朋と掃除坊主とは元より異なるなりといへり。

○坪坂新五郎塚

二、丸藩侯寢殿の居間先に、國初前より古墳あり。新五郎塚と稱す。墳の邊に根笹生茂りたり。舊藩中城内掃除の者、根笹の繁延するを刈取りけるに、折々刈録にて怪我する事ありとて、甚だ恐れたり。故に圍をなし、墳の邊へ人の立寄る事を禁ぜられたり。墓印として山櫻の古木一株あり。古來尾山櫻と呼べり。金城深秘録にも、新五郎塚は御居間先に有之。墓印の櫻木を尾山櫻と云ふ。此塚松坂の邊にて、松坂は昔下間等居住の時分は墓所多有之處、御築城の時御

居間先下一と所へ被集、舊跡に石建有之。中にも新五郎塚は、往昔のまゝ指置かれたる由也。此塚の邊に有之竹木等伐取方被爲成やう、傳承も仕罷在。享和年中此所石垣普請就被仰付、墓所へ斷申入れ取懸りたり。昔より不思議成る事も有之様承傳候。とあり。抑、此の古墳の傳説、諸記録に記載するもの區々にして一ならず。毛利隼之助詮益の拾纂名言記に云ふ。松坂檢校へ利常卿尋ねさせ給ふ。塚あり、本源寺が塚なるか。左やうとは不承、本源寺が殿原の塚と承ると申上ぐると。此の事松梅語園にも載せたり。又淺加久敬の隨意雜錄に、金澤城の先主は坪坂圖書と云ふ。城代坪坂新五郎二、丸に居住す。其塚于今二、丸に在りて新五郎塚と云ふ。とあり。是正説なるべし。加藤惟寅の蘭山私記にも、二、丸御居間先に昔より墓所と云傳へて竹林ありしを伐らせ、掘抜の井戸を命ぜらる。此地墓所といへども、古蹟あるに非ず。二十間許の所を墓地と云傳へたり。昔本願寺支配の頃、浪人勇力の者坪坂圖書と云ふ者の城代に坪坂新五郎二、丸に居住す。此新五郎の塚也と云ふ。とあり。此の記に據れば、そのかみ竹林なりしと聞ゆ。また堀某の

加府事迹實錄に云ふ。城内二、丸居間先に古蹟あり。昔當城の開基本源寺の墓とも、又坪坂新五郎の墓とも、七里三河守の墓とも云傳へたり。其側に櫻樹あり。星霜を経て枝葉蔓るといへども切捨てられず。古墳も改價して丸墳とし給ふ。其仁政追慕すべし。昔道場の時の灰塚數多あり。悉く崩し捨つるといへども、本山開基の塚なるが故に其のまゝ指置かれ、天正の頃までは慶覺寺より燈籠を建てたりと云傳へたりと。有澤永貞の古兵談殘囊集には、二、丸に有之古墳は、坪坂伯耆守の子坪坂新五郎と云ふ者の墓なり。新五郎は大剛強者たりしと云ふ。諺説に於山と云ふ女の墓と云ふは悪し、と也。又寛文十二年の箕浦五郎左衛門高良筆記には、御墓と云ふは本願寺七代廿五日の上人、今は四十萬村の山に移すと載せたれど、此の墓は別なるべし。又三州志來因概覽附録にも、種々此の古蹟の事を論辨せり。其の説に云ふ。二、丸は天正の初、賊魁坪坂伯耆居す。今猶二、丸便殿近く坪坂の遺墳存す。城主記に、坪坂新五郎を伯耆の父とす。然れども加邦録等皆伯耆の子とす。此の古蹟金城と成りても、猶二、丸の居室近く在りて老櫻樹残るを、